

いう労働になると考えたからです。それを、人々から神のことを語る指導者とみられていた主イエスが、咎めなかったことです。

そこで、主イエスは禁止事項の例外を指摘します。ダビデは聖別されたパンを手に入れたことがあります(サムエル記上二一章)。また、祭司は安息日の規定を免じられていました。神殿に仕えるからです。祭司が働かなければ、礼拝が成り立たないからです。

ファリサイ派は律法の監視役を自認し、そのために規定違反を探すことに縛られるようになったのです。

そこで、主イエスは御自分のことを「神殿よりも偉大なものがここにある」と言われま。神殿よりも偉大なことは神の御業ですし、主イエスご自身のなさったことです。主イエスは天の国の到来を告げました。それは神殿で行われている祭儀以上のものです。現実の主の言葉によって、それを聞くすべてのものに神の支配が実現するのです。犠牲を捧げて神に受け入れられようとする以上のことです。むしろ主イエスは安息日の成立を禁止事項の徹底に求めませんでした。

主イエスは安息日に慈しみを求めています。安息日は神の慈しみによって成り立っているからです。そして、さらに主イエスご自身が神の慈しみとされるからです。

これを知るためには、礼拝が神の憐みによって成立していることが分かなければなりません。

教会の礼拝の歴史の中には「神よ、憐みたまえ」によって始まる礼拝があります。今でもその言葉を入れた礼拝が行われることがあります。その言葉によって礼拝が神の憐みに

よって成り立つことを明らかにすることになります。人の行為や奉仕によるのではない。むしろ、礼拝に安息があるのは神の憐みを身に受けるからだ。そのためには、自分の業を捨て、神の前にたたずむことに思いを向けなければならぬのです。

礼拝の行為は基本的に、主体が自分にあるのではないと言うことができます。わたしたち礼拝者はこちらから何かをするというのではなくて、まず、命を与えられて、生かされ、救われ、赦され、呼び集められ、御言葉を聞くのです。それに応答して祈り讚美し捧げものをします。

これは憐みを受けて、礼拝者とされていることを示します。主体が主なる神であり、わたしたちはその前に静かにたたずむことが大事で、どれだけ神の御言葉が恵みを味わわせてくださるかを受け止めねばならないのです。そして、憐みと恵みによって生きることが、わたしたちの人生そのものを特徴付けるものになります。礼拝にある生き方はわたしたちの生き方全体の特徴になります。わたしたちの生き方にはこの筋があります。つまり筋の通った生き方になるのです。

神がこの体と命をお与えくださった。そして生きるものとされた。わたしたちはこの命の意味を知っているのです。ですから、礼拝には命の意味と価値がかかっているということができるのです。

礼拝を重んじるといえるのは、自分の命を重んじることになります。礼拝の喜びは、人生を喜ぶ喜びです。

(二〇二三年一月一日 新年礼拝)

## 二〇二三年一二月講壇一覽

第一主日(一二月四日)

アドベント第二主日礼拝

「贖罪の名」

詩編 一三〇・一〜八

マタイ 一・二〇〜二一

高橋和人牧師

第二主日(一二月一日)

アドベント第三主日礼拝

「人間を照らす光」

イザヤ 七・一四

ヨハネ 一・一〜一八

姜 俣米牧師

第三主日(一二月一八日)

アドベント第四主日礼拝

「愛の起点」

エレミヤ 三一・二〜六

ヨハネの手紙一 四・七〜一六

高橋和人牧師

クリスマス聖夜(イブ) 礼拝(一二月二四日)

「神、われらと共に」

イザヤ 九・一〜六

ルカ 一・二六〜三八

マタイ 一・一八〜二五

高橋和人牧師

第四主日(一二月二五日) クリスマス礼拝

「私たちのメシア」

ミカ 五・一

マタイ 二・一〜一二

姜 俣米牧師